

Editor's eye

・特集・

新しい角化異常症の世界

編集担当 浅井 俊弥

今回のテーマである角化異常症は、最近の皮膚科学の進歩とグローバル化をもっとも実感できる分野の1つである。遺伝子解析の技術が向上したことで稀少疾患の病因遺伝子が同定され、それをコードする蛋白質の機能を解析することで、皮膚という臓器のもつ生物学的な特徴が明らかになり、それが身近な疾患の病態の解明や治療につながってきた。これまで多くの遺伝性魚鱗癬の病因を世界に先駆けて明らかにしてきた武市、秋山らの最新の研究結果を、彼らの「総説」で読み取ることができる。

汗孔角化症の概念が大きく変わったことも注目に値する。久保が自らの研究成果を示した「Topics」を是非一読していただきたい。汗孔角化症の1つ1つの皮疹が、変異したケラチノサイトのコロニーであることを、線状汗孔角化症と播種状表在性光線性汗孔角化症で確認した。汗孔角化症が環状になる仕組みも非常に興味深く、中央の一見正常と思われる部分は変異を生じた細胞の集まりであり、それが陣地を広げていくために環状になること、また辺縁のcoronoid lamellaに一致した部分では変異した細胞と正常の細胞のせめぎ合いが生じていることを明らかにした。さらに、臓器移植後に生じた症例、悪性腫瘍に伴った症例、薬剤によって誘発された症例の報告も集まり、汗孔角化症が奥深い疾患であると感じることができるに違いない。

Darier病、Hailey-Hailey病、毛孔性紅色秕糠疹、Bazex症候群などの開業医でもまれに経験する疾患や、見落としがちな点状掌蹠角化症、Hereditary papulotranslucent acrokeratodermaといった疾患の症例報告もあり、最新の知見と日常診療の参考になる症例報告が組み合わせられ、本誌の目指す特集号になったと自負している。